

三宝づくりの技術を活かし「神具から新具へ」展開する

吉谷木工所 奈良県吉野郡下市町

■吉野檜を使用した奈良県伝統的工芸品の三宝

奈良県吉野郡下市町で三宝・神具を製造販売する吉谷木工所は、1910（明治43）年に創業、以来112年にわたり三宝一筋に営んできた。三宝とは、神仏への供物や鏡餅、月見団子を載せる台で、約700年前の南北朝時代に後醍醐天皇が吉野に都を移した際に天皇への献上物の器として使用されたのが始まりと伝えられている。「当時から形が変わっていないとされており、後醍醐天皇も今と同じ形の三宝を使っていたかもしれない」と6代目代表の吉谷侑輝氏は話す。下市町が発祥とされる三宝は奈良県伝統的工芸品に指定されており、全国シェアの8~9割を下市町が占めるという。

三宝の材料は、木目の線が端正で色合いの美しさが特徴的だと言われる吉野檜^{ひのき}。檜は粘り気があるので使いやすく、曲げにも強い。三宝を作る際に最も重要と言える「挽曲げ^{ひき}」は、1枚の板に数か所スリットを入れて接ぎ木することなく曲げる技術で、絶妙な曲げ具合になるように計算されており、入れるスリットの数と深さで四角形や八角形など様々な多角形を作り上げることができる。

■伝統技術を時代のニーズに合った形で活かす

日本の生活様式の変化に伴って三宝の需要は減少すると考えた吉谷専務は、現在の生活に密着した木工製品の開発を進め、ダストボックス、植物の鉢カバー、小物入れなどインテリアオブジェとして自由な発想で使える八角形のマルチボックス「八宝（HAPPO）」を完成させた。八宝はその技術力の高さや珍しさから、各地の隠れた逸品を選ぶ『にっぽんの宝物 Japan（全国大会）2020-2021 工芸・雑貨部門』のグランプリを受賞。その他、日本遺産に登録されている曲げの技術を駆使したトング「TONGI（トン木）」やお弁当箱、お盆（ダイニングトレイ）などを製作している。長年

培ってきた伝統的な技法を時代のニーズに合った形で活かすため、「神具から新具へ」をキャッチフレーズに、今までの三宝のイメージを払拭するような現代の生活にマッチした新商品を展開している。

木という自然の物を使っている木工製品は、木目や材質が違って当たり前で、1つとして同じものは作れない。吉谷専務は「気温や湿度によっても質が変わるため、機械や材料と対話するように扱っている」と言い、「この仕事を始めてからは店で商品を見た時、その商品が出来上がるストーリーが気になるようになった」と語っている。日本遺産の技術を使った自分たちの商品が伝統工芸の世界に新しい風を吹き込めれば、と吉谷専務の挑戦は続く。

（八木陽子、村井 渚）



（左上から時計回りに）レーザーで柄が施されたトレイ、力を入れずに掴むことができる「TONGI（トン木）」、従来の用途にとらわれず、花を飾った三宝、インテリアになじむ「八宝」

吉谷木工所

〒638-0045
奈良県吉野郡下市町新住 41-10
TEL: 0747-52-2447
FAX: 0747-52-1478
URL: <https://yoshitani-sanbou.com/>



吉谷侑輝 専務